

ふるさと

小川未明

青空文庫

きた 北の故郷を出るときに、二羽の小鳥は、どこへいっても、けっして、ふたりは、はなればなれにならず、たがいに助け合おうと誓いました。すみなれた林や、山や、河や、野原を見捨て、知らぬ他国へ出ることは、これらの小鳥にとつても、冒険にちがいがなかつたからです。そして、ふたりは、春まだ早い、風の寒い日に高い山を越えました。

いつも、ほんのりとうす紅く、なつかしく見えた、山のかなたの国にきてみると、もはや、そこには、花が咲いていました。吹く風もあたたかく、いろいろの草は、すでに丘に、野原に、緑色に萌えていました。

「こんなに、いい国のあることを、なんで、いままで知らなかつたのだろう。」と、ふたりは花の咲きにおつている木にとまったときに、顔を見合つて語つたのです。

「なぜ、昔から、あの山を越すといけないといったのだろう。」と、一羽の小鳥が、ふるさとにいる時分に、年とつた鳥たちの注意したことに、不思議を抱きました。

「それは、こういうわけなんだ、……もし、いいといたら、私たちはまだ遠い旅がされないのに、早く出かけるから、あの山のかなたは、怖ろしいところだ。あちらへいくと、もう、二度とここへは、帰られないといったにちがいない……。」「と、ほかの一羽の小鳥

は、いいました。

「ほんとうに、そうなのだ。いつも、みんなが、この国へきて、すめばいいのにな。」

ふたりは、年とつた鳥たちが、あのさびしい野原や、風の寒い林の中を、いちばんいいと思つてゐるのを笑いました。

それから、あちらの木かげ、こちらの林と、二羽の小鳥は、思い、思いに、飛びまわつて、唄をうたつていました。こうするうちに、彼らはだんだんこの土地に慣れたのであります。

「もつと、あちらへいこうよ。」と、一羽が、いいました。

「あまり、人間のたくさんいるところへいくと、あぶなくないか？」

「人間の姿を見たら、すぐに逃げればいいのだ。」

ふたりは、こういしましめあつて、里の方へ出かけてゆきました。田畑は、どこを見てもきれいに耕されていました。そして、うす紅や、黄色の花や、紅い花などが咲いて、また、北の自分たちが生まれた地方では見なかつたような、美しいちようが、ひらひらと誇らしげに花の上を飛んでいたのであります。

「あんな、美しいちようが、平気に飛んでいるじゃないか。」と、一羽の鳥は、一本、

野中のなかに立たっている木きにとまったときに、友ともだちをかえりみて、いいました。

「きれいなばかりが、あぶないのでないだろう……。ちようは、唄うたをうたわない。けれど、私わたしたちはさえずることもできるから、あぶないと思うおもうのだ。」と、一羽わの小鳥ことりは、考かんえ顔ががおをして、答こたえたのでした。

「そんなら、ふたりは、だまつていることだ。」

「そうだ。だまつていよう。」

二羽わの小鳥ことりは、鳴なかないことに、相談そうだんしました。そして、町まちの近くちかまで飛とんできました。北きたのふるさとは、見みられないものを見みたばかりでなく、そこでは、まだ、聞きいたことのない、いろいろのいい音ねを聞ききました。

「私わたしたちは、風かぜの音おと、波なみの音おと、他たの鳥とりたちの鳴なく声こえしか聞きかなかつたが、ここでは、なんといい音ね色いろが聞きこえてくることだろう……。」「と、一羽わの小鳥ことりは、くびをかしながら、いいました。

「やはり、人間にんげんは、偉えらいな。」

「私わたしたちばかりが、いい声こえを出だすのでない。この世よの中に、私わたしたちほどの、いい音ねが、あちらから聞きこえないと、年としよりは、よく私わたしたちに聞きかしたが、あんなに、いい音ねが、あちらから聞きこえ

てくるでないか？」と、一羽ひととりの小鳥こどりは、感心かんしんしました。

「あ、それでわかった。年としよりたちが、山やまを越こえて、遠とおくへ行ってはならないといったのはそのためだ。だれでも、自分じぶんたちが、いちばん偉えらいと思おもつていれば、たとえ不自由ふじゆうをしても、のんきでいられるからだ。」

こんなことを話はなしているうちに、いつしか、黙だまっているという誓ちかいを忘わすれて、ふたりは、人間にんげんがやっている音楽おんがくの音ねに、自分じぶんたちも負まけない気きでうたいはじめたのでした。

すると、ふたりのほかに、どこからか、自分じぶんたちと同じおなような声こえで、うたったものがあります。

「だれだろう？」

旅たびの空そらで、仲間なかまのうた声こえを聞きくと、二羽ふたどりの小鳥こどりは、じつとしていられなくなりしました。

そして、その声こえのする方ほうへ飛とんでゆきました。声こえは、ある家うちの軒のき下したからもれてきたのです。ふたりは、庭にわさきの木立こだちにとまって、その声こえのする方ほうをのぞくと、哀あわれな仲間なかまは、狭せまいかごの中なかにいれられて、しきりと、外そとを見み上げていました。

「人間にんげんに、捕とらえられたのだな。」

「かわいいそうにな。」

ふたりは、小さな声で話をしていたが、ついに、かごの中の鳥に向かつて、話しかけたのです。

「どうして、人間などに捕らえられたんですか？」

「みんなそう思うでしょう。あなたがただって、もうすこしここにいてごらんなさい、いつか私のようになってしまうです。私はもう、このかごの中に、二年もいます。しばらく仲間の声を聞かなかつたのに、今日めずらしくあなたがたの声を聞いて、自分も、つい大きな声を出して、お呼びもうしたのです。」と、かごの鳥は、答えました。

「しかし、人間は、あなたを大事にしているようじゃありませんか。」

「それは、餌や、水には、気をつけてくれます。ときどきは、青菜などをいれてくれます。しかし、自分で、ほしいものを気ままに、探すという喜びもなければ、また、自由というものもありません。あのようにな、空を飛んだ、私の翼は、もう飛ぶ用がなくなつてしまいました。」

「気ままに飛んでいる私たちには、自由のありがたみが、ほんとうにわかりませんが、こちらは、いろいろの花があり、それに、暖かです。いいところではありませんか。」

「いいえ、あの風の寒い、空の青い、北のふるさとが、いちばんいいところです。人間

は、器械きがいを持つています。それを使つかつて、飛とんでいる鳥とりをうつこともできれば、また、巧たくみな方法ほうほうで生擒いけどりにすることもできます。あなたがたも、はやく、見みつからないうちに、お帰かえりなさい。」と、かごの鳥とりは、いいました。

「どうかして、そのかごの中から、逃にげ出すことはできませんか……。」と、ふたりは、哀あわれな鳥とりにささやいたのであります。

かごの鳥とりは、うらめしそうに、こちらを見みていたが、

「逃にげ出だしても、私わたしには、もはや、あの山やまを越こすだけの力ちからがありません。それより、あなたたちは、はやく、ふるさとへお帰かえりなさい。夏なつになると、この国くには、とても暑あついのです。」と、いいました。

二羽わの小鳥こどりは、なるほどと考かんがえました。そして、急きゆうに、ふるさとがなつかしまれたのであります。それから、まもなく、ふるさとを指さして帰かえりました。ふたりは、きたときのように、途とちゆう中ちゆう幾いくたびも木きにとまつて休やすみました。

「あの国くににすんだにしても、みんな生擒いけどりにされたり、殺ころされたりするものばかりでもないだろう。」と、ひとりがいいますと、

「美しい花はなの咲さくところや、にぎやかなところにはばかり、私わたしたちの幸こう福ふくがあると思おもった

のが、まちがつていたのだ。やはり、平和で、自由に暮らせるところが、いちばんいいのだ。」と、ひとりが答えました。

ふるさとに帰ると、すっかり春になっていて、清らかな、香りの高い、花が、南の国ほど、種類はたくさんなかったけれど、山や、林に、咲いて、谷川の水が、朗らかにさやいていました。年とつた鳥たちは、ふたりの帰ったのを喜びました。そして、ふたりは、昔の生活に返つたが、ときどき南の方の空をながめて、あの空の下にいる不幸な仲間の上を考えたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「ふねやと 47巻2号」小学校

1929（昭和4）年5月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ふるさと

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>